

『未来をつなぐ人間物語』書評・感想集

AMITA Books に掲載されている電子書籍『未来をつなぐ人間物語』をお読みいただいた方々の書評・感想です。まだお読みになっていない方は、以下 URL から読者登録いただけます(無料)。

AMITA Books 電子書籍ダウンロード申し込みフォーム：<https://business.form-mailer.jp/fms/ff84e6b222217>

■たぬポン 徳島県出身 50代 会社員

入谷地区の住民の皆様「無償の奉仕」に感動いたしました。

報道では入谷地区の皆様は全く触れられていませんでした。30年前、御巢鷹山に墜落した日航機の救助活動も地元の消防団員30名の命を掛けた救助活動により5名の方の尊い命が救われました。しかし、報道各社は自衛隊の救助ヘリの直ぐ横で乗客が病院へ搬送されていくのを見送っている消防団員の方達が居るのを知りながら全く報道しませんでした。消防団の方達はヘリの待機所までの30度以上の急斜面を3時間かけ登っていったのです。真実は直ぐには報道されないのでしょうか。

要介護の母がいるので遠くから「声援」を送ることしか出来ない自分がハガユイです。入谷地区や被災地域で育った子供達がきっと日本を素晴らしい国に建て直してくれると確信しています。残念ながら現在の政治家や役人及び官僚では日本は蘇りません。

がんばんべし 東北！

■匿名 仙台市出身 40代 会社員

震災から1000日を迎えた日に拝読しました。

あの日、私は東京にいましたが、実家が仙台なので沿岸部にはお休みの日に遊びに行った思い出の場所が多々あります。あの日の夜、テレビで暗闇の中燃えている町を見ながら「地獄みたいだ」と思っていたことを思い出しました。震災後に初めて沿岸部に行った時に目にした泥だらけの風景を思い出しました。

震災後、復興支援活動に取り組む中で、豊かさとは何かを考える様になりました。貨幣経済の常識を押し付けてはいないか、本当に人々が豊かに暮らすという事はなんだろうと考え、私自身の答えは出ていませんが、アミタさんが出した一つの答えが里山を見直し循環型社会を再構築することなのだと、そしてその答えに向かってあらゆることに取り組んでいく企業姿勢には感銘を受けました。

豊かな日本の事例として育っていくと良いなと感じました。

■匿名 東京都 40代 男性 無職 (元会社経営)

持続可能をコンセプトにした経済循環モデル、お役所が進めてきた、ハコモノやテーマパーク、ご当地グルメなどの焼き直しでなく、循環して活かすスタイルを文化の遺伝子～ミーム～のサプライチェーン、ひいては文化が息づいているスタイルとして展開されていく姿勢に、共感しました。

米、薬草など、その地域に物語がある素材を活かし、復興させていく。そのために、高島などのモデルを活かしてつなげていく、文章ですからサラッと書かれていますが、ご苦勞をされたと脱帽の思いです。

それぞれ復興にかける思いを、過疎化、限界集落化する日本各地の田舎の復興につながる、プロトタイプをつくる。南三陸モデル。

復興の光と影もあり、復興予算が復興ではなく、復旧に注がれ、お金は大手ゼネコンに流れ、仙台はミニバブルと言われて、このスキームは近代化そのものだと、自身は思い込んでいました。しかし、地に足のついた取り組みを拝読して行く中で、光が見えてきました。

京都でソーシャルデザインといえ、コミュニティーデザインの山崎亮さんが著名ですが、あの方が、たくさんの人に年に一度訪れてもらうよりも、年何度か訪れてもらえる街づくり、密度をデザインの幹にされています。釈迦に説法のお恥づかしいですが、この考え方は、ライフタイムバリュというマーケティングの考え方とフィットしていて、自身もマーケティング上がりなのでフィットしていました。

これからの時代、ナレッジファームというか、コンテンツファームがより進化して行くような気がしました。それぞれの循環モデル、有機農法モデルがオープンとなり、共有され、進化していく仕組み。啓発、共感、シンクロが続きました。

■会社員 やまちゃん (ペンネーム) (50代)

期間をおいて2度、読ませていただきました。私は「3.11」、即ち東日本大震災の教訓を踏まえた提言書を有志約30人でまとめたことがあります。130ページくらいの提言書でしたが、これはこれでたいへんな作業でした。何といても事実関係を整理するのは意外に難しく、どこまで本当なのかを検証すること、つまりは出典、その根拠を明確にすることにかかなりの時間を費やしました。著者の本多氏は元ジャーナリストということも考慮しても、お一人でこれだけの情報を集め、事実関係を明らかにされたことに、心から敬意を払います。ぜひ私の研究会メンバーにも、本書を紹介したいと思います。

さて、「豊かさ」については日頃から自問自答していたテーマです。何かヒントをいただいような気がしますが、自身の答えは出ていません。「豊かさ」は心が感じる「幸福度」と言

えるのでしょうか？さまざまな意見があると推察します。

近頃、2013年度の世界幸福度レポート（World Happiness Report）が、コロンビア大学地球研究所から発表されました。これによると、世界で最も幸福度の高い国はデンマークで、続く2～5位は順にノルウェー、スイス、オランダ、スウェーデンとなっています。評価基準としては、富裕度、健康度、人生の選択における自由度、困ったときに頼れる人の有無、汚職に関するクリーン度や同じ国に住む人々の寛大さなどの要素が考慮されています。この総合ランキングで、アメリカは17位と、メキシコ（16位）より下に位置していたのが意外でした。アジアで一番ランキングが高いのはアラブ首長国連邦の14位、シンガポールが30位、タイが36位、日本が43位などとなっており、日本は本当に豊かな国なのだろうかと考えさせられます。

第3章・未来を想うで「人材」について述べられています。人材は「人財」「人材」「人在」「人罪」に分かれ、利他的で社会に貢献する人は「人材」「人財」と言えるのではないのでしょうか。願わくは、私も「人材」「人財」と言われるよう、これからも地道に努力していこうと考えています。その努力のプロセスの中に、「豊かさ」を一瞬でも感じられることが多いような気がしています。

最後に、アマタHDが「人材」「人財」の宝庫であることは言うまでもありません。

■小湊英芳 33歳 男性

AMITA Books 電子書籍「未来をつなぐ人間物語」内にある宮城の「プライド」よみがえるササニシキ、を読むまで、ササニシキは、東北で生産されているお米のどこかに入っているだろうと思っていた。でも、そんなことはなかった。ほとんどがコシヒカリの系譜だった。そう気づくと、なんとかして食べてみたいと思うが、スーパーに並んでいない。ササニシキはどこに行ってしまったんだろう。

僕の母の実家は、宮城県石巻市にある。といっても、市町村合併で石巻市になったので、涌谷町や登米市などの内陸部寄りの地域だ。震災そのものの被害は少なかったものの、物流が復旧するまでは、僕の母が、当時産まれたばかりの姪に、紙おむつや粉ミルクを送ることに腐心していた。

先日、震災後2度目の帰省を果たすことができた。大人になってから、母方の実家に、年に1度訪れるようになるとは、思ってもいなかった。田舎の家族に会うのも楽しみだが、実際に足を運んで見てみないと、文字や映像で得られる情報量では、地震がどれほどの被害をもたらしたのかを、理解したことにならないんじゃないかと思ったからだ。

2回とも、国道45号線をひたすら北上するルートで、気仙沼まで行くドライブだ。田んぼ

の中の一本道を抜けると、緩やかな峠にさしかかる。峠を下りきると南三陸町戸倉地区にたどり着く。カーナビを見て、我が目を疑う。カーナビには駅が表示されているが、影も形もない。小学校が表記されている。それもない。郵便局も、集落も、全て。ただ絶句するばかりだった。そんな光景を、気仙沼にたどり着くまでに、幾度となく繰り返し目の当たりにする。生活の再建とか、震災からの復興なんて言葉は、全く意味のない言葉に思えてしかたない。失ったものの大きさばかりが目につく。

ドライブから帰ってきて、夕飯をいただいた後、ふと先ほどのササニシキの話を思い出し、今でもササニシキを作っているのかどうかを、叔父さんに聞いてみた。すると、意外にも、

「ササ（ニシキ）はずっと作ってる。」という返事が返ってきた。

「東京の方だと人気ないんだよなあ。アキタコマチとかなら人気あんだけど。」

「でも、やっぱ、ササがうめえんだよな。」

文中の中にある農家の人と異口同音だった。東京だと人気がないんだろうな、というのがどうも気になった。僕は今までササニシキの味について評判が悪いというのを、聞いたことがない。1994年の大冷害でササニシキが取れずに給食でタイ米になった時に、日本のお米がどれほどおいしいのかを痛感した。それ以降、冷害に強いお米をとの要望から、コシヒカリの系譜のお米ができ始めたのは聞いているけど、コシヒカリと比べてササニシキが人気がないというのは、正直聞いたことがない。このギャップは、どういうことなんだろうか。

おそらく、ササニシキを食べようと思ったら、ササニシキを買わないとならないという、農家の方々からすればごく当たり前の事実を、僕を含めた多くの人が気づいていない。場合によっては、ササニシキというお米があることすら、知らない人もいるはずだ。これは、品質が認められていないから買われていないということではなく、ササニシキがコシヒカリと双璧をなすほどおいしいお米で、冷害に負けないようにコツコツと品種改良もされている事実を知らない人が大勢いることが問題で、上記の事実を知らしめる機会を増やすことで、ササニシキの認知を上げることが必要なんじゃないか。その上で、さらなる品質向上のために、有機栽培まで始まっていることも伝われば、強い物語性を持って多くの人に届けることができるのではないか。強い物語性があるということは、感情移入する余地があるということであり、自分自身とのつながりを意識しやすくすることで、商品に新たな付加価値を与えるからだ。

今回の震災で、人それぞれに事情があつて、苦渋の決断で住み慣れた土地を離れざるを得なかった人も、大勢いたはずだし、何が正しいのかを僕が判断する立場にもないけど、その地域に根付いている「姿勢」や「心意気」は、今も気仙沼や南三陸、ひいては日本各地に脈々と受け継がれているんじゃないだろうか。そして、これらを人々の心から呼び起こすことができれば、僕たちは何度でも立ち上がれるのではないか。あれだけの被害があ

ったにも関わらず、三陸沿岸での生活を諦めない人がいるということは、人の生活と風土は簡単に切り離せるものではない、ということだと思ひ、だからこそ、その歴史をあらためて見直すことが、三陸沿岸での人々の生活が綿々と続いて来たことの証明となり、これからの被災地の復興につながるんじゃないかと思うのです。

■会社員 男性 (40代)

全てを失った後に機能したものは、かつてはマイノリティとして押しやられた世界だった・・・”震災の本”として読み始めましたが、もっと大きな問題提起でした。

「持続可能な循環型社会モデル」とは何か。

「市場型社会」と「自給型社会」の進化形とは？

「生活弱者」とされていた方々も価値の提供者となり、

本当の意味で互助・共助・自助が成り立つ世界。

単なる懐古趣味ではなく、かつてのムラ社会が進化・深化したヒトが主役の社会の実現に向けて、微力ながら一人称で行動していきたいと強く想いました。

■HOSP！（持続可能なコミュニティを本気で作る大人たちの会） 鐘木 孝昭

断片的に聞いていたアマタさんの取り組みが多少なりとも理解できたと感じました。内容はどのパートも興味深い内容でしたが、ササニシキの話が、自分も忘れてしまっていたことを思い出させていただいたので、もっとも印象に残りました。ありがとうございました。

■会社員 男性 (40代)

東日本大震災を振り返り、記録あるいは記憶としてとどめていく上で、特に第一章が心に残りました。読むのは少々辛い（心が締めつけられるという意味で）所もありましたが、こうした振り返りが大切なのではないかと改めて感じました。

一方、現在の取り組み、未来に向けた取り組みなどは、まだ模索中という感じが強かったので、今後に期待したいと思ひます。ただ、それでももう少し全体像が描けていれば分かりやすかったかなと感じました。場面の積み重ねは、イメージしやすそうに感じますが、それだけではやはり上っ面な印象が否めません。南三陸を舞台にした近未来小説を書くぐらいのバックグラウンドが構築されていると、もう少しリアリティを感じられる内容になったかと思ひます。特にネガティブな部分まで含めた想定がされていると、厚みが違ってくるのではないのでしょうか。

■会社員 川中 三四郎 (ペンネーム) (50代)

私は、昨年7月「東京災害ボランティア」の一員として、赤帽をかぶり南三陸町を4日間訪問しました。ただ、本当に微力なお手伝いしかできませんでした。ふれあい喫茶と称し、皆さんと少しだけお話をさせていただきました。でも、その現場でアマタさんが持続可能なビジネスを構築する為に奮闘されているとは思いませんでした。ステージが違うほど進んでいます。そうある

べきなのでしょう。南三陸町のおばあちゃんたちは歌がうまくて、いつまでも歌っていました。

■農業、漁業経営・女性 (30代)

被災した当事者として、読み進めるのがときに辛いくらいリアルで、改めてあれから二年もたったんだな、早かったなと。すごく大変で、何もかも嫌になることもあるけれど、これからも生きていかないとなって、思いました。第三者として、知識人として、社会的考察をしつつも、地元の方の想いに寄り添っていることも伝わってきて、陸前高田にも来て欲しいなとか。お会いしたくなりました。

■会社員・男性 (20代)

東北出身です。この本を読んで、幼い頃に食べたお米の味を思い出しました。そのササニシキが、被災地である南三陸で復活しようとしていることに勇気づけられました。また、遠く関西でササニシキを育てた方々や南三陸の方々の想いをこのルポで読み、私も自分の仕事に「想い」を込めて、生きて行きたいと思いました。

■会社員・女性 (30代)

読んでよかった。何度も泣きました。震災の事だけでなく、今の社会の色んな矛盾や生きる事の意味、地域が抱える課題と守るべき宝物…そんなことを考えるきっかけになりました。続編を出してほしいです。

(注：敬称略)

アマタホールディングス株式会社では、今後も、『未来をつなぐ人間物語』についてご投稿いただいた書評・感想をアップしていきます。

まだお読みになっていない方は、ぜひ以下 URL から読者登録のうえ、お読みください。

AMITA Books 電子書籍ダウンロード申し込みフォーム：<https://business.form-mailer.jp/fms/ff84e6b222217>